

赤シャツと小野さん

Junko Higasa 2013.12.23

『坊っちゃん』の赤シャツは、かねてから憧れていたマドンナに言い寄った。それは彼女の婚約者の家が没落したために、状況が停滞しているときだった。赤シャツは「約束のあるものを横取りする気はない。破約になったらもらうかもしれない」と言う。赤シャツのチャンスの生かし方は、相手の弱みに付け込んでいます。しかし卑怯でありながら正当である。

一方『虞美人草』の小野さんは、富裕才色兼備の藤尾に結婚を望まれている状況下で「小夜子とは正式に約束したわけではないから」と、結婚の時をひたすら待つ古風な女を断るつもりである。小野さんのチャンスの生かし方は、自分の強みを押し出している。一見正当でありながら卑怯である。

赤シャツの場合はマドンナと結婚を考えるが芸者とも遊ぶ。女の立場は低く男の立場は高い。小野さんの場合は社会進出は藤尾のご機嫌次第である。女の立場は強く男の立場は弱い。漱石はこの対照的な二つの三角関係で、違法でないことで自分を正当化できる結婚を、松山の文学士である赤シャツと東京の詩人である小野さんという言葉の専門家に語らせる。そして赤シャツは自分の分野でうまくマドンナを振り向かせるが、小野さんは藤尾に負ける。そこには急速に発展する文明社会と、その普及度の地域差が反映される。漱石は男の法に適った知識の勝利と、女の人道上の勝利をそこから引き出している。